UrbanDesignLab.Magazine

東京大学都市デザイン研究室
工学部都市工学科／工学系研究科都市工学専攻
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/

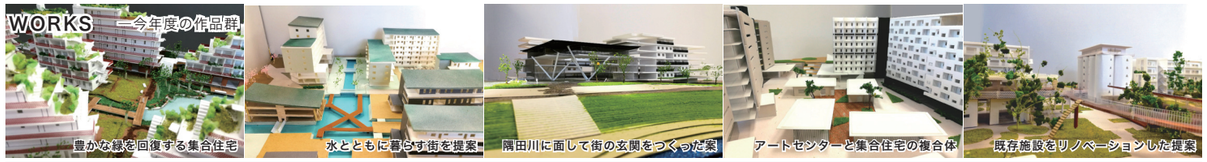
編集長：松田 季詩子
編集委員：神谷 安里沙　田中 雄大　中村 慎吾
岡山 紘明　但馬 慎也　中戸 翔太朗

初夏、道半ばを問い直す　How has been Your Progress?

2017.07.31 vol.255

3年生設計演習、今年度も終了する

7月13、14日に、都市工学科3年生の1つの山場となる設計演習「地区開発計画」の最終発表が行われました。
都市工学科に進学して間もない学生にとっては"デザ研カルチャー"が詰まった必修授業「設計」の集大成として、都市デザイン研究室にとっては「夏の風物詩(マガジン vol.174)」として、そのどちらにも例年鮮やかな記憶を残してきた「地区開発計画」。かつては学生、今は研究室の端に在籍する身として、この演習の「作り手」に迫りたいと思います。(M2 松田)



学部3年設計演習「地区開発計画」の流れ

1. グループ作業 **調査・分析、戦略立案**　現地調査・資料をテーマ別に分析。その結果を横断し、現在と将来の課題に対応した戦略を作る
2. グループ＋個人作業 **規模が近い事例の研究**　個人の気になる事例を選択し、その写真・部分図面・気になる工夫を複数カードにまとめ、みなで共有する
3. 個人作業 **地区全体の計画**　今までの分析をもとに個人設計に。まずは全体模型を作成し、敷地全体のプランを考えていく
4. 個人作業 **選択部分の詳細計画**　指定された（あるいは選んだ）敷地の一部を、人の動きが見えるようなサイズで形作り、空間を詰める

▶ 設計の洗練・プレゼン準備 ▶ 発表 ▶ 一部作品の外部講評会

「地区開発計画」—20年弱の歩み
The Transition of DUE Studio

20年弱の歴史を持つ「地区開発計画」とその前身である「住宅地演習」は、ともに住宅地を設計するための基本技能を習得する演習だ。「地区開発計画」が始まった際の1つの大きな変化は、後者が高水準の住宅を作ることに主眼を置いていたのに対して、街の抱える特性や社会状況を「テーマ」として、住宅を鍵に地域全体の将来像を描き出した点かもしれない。
地域の将来像を空間的提案に落とし込むという姿勢を通貫しながら、先生方と学生たちの間の相互作用の中で受け継がれ、かつ変化してきた要素を、過去7代15年にわたる課題の敷地から追う。

❶ 2003 - ー（テーマの名称なし）
渋谷区 都営青山北町団地及びその周辺

敷地に続く青山通り

前書き ー
表参道の1歩裏の閑静な地にある都営青山北町団地と、そこに接する**青山通り沿いの街区で、商業施設・公園を包含した新しい都心居住街区を検討する。**

❷ 2006 - ❸ 2007 - 都心ウォーターフロントの再生と魅力ある住空間の創出
品川区 都営品川アパート周辺

巨大な北品川アパート

江東区 越中島の倉庫用地

小学校手前の住宅

Theme
都市の「裏側」と捉えられていた東京湾岸部の再編が起こっているが、その開発論は一様である。水辺の魅力を発揮するために、都市再生の観点からの計画やデザインが必要だ。

❹ 2008 - ❺ 2012 - 都心ブラウンフィールド再生と魅力ある住空間の創出
江東区 森下3丁目小名木川沿い

静かな空気漂う小名木川

Theme
東京都心部では近年、**産業用地が人間活動の空間として転換される**動きがある。都市構造再編のポテンシャルも影響も併せ持つこの地で、多様な生活や新しい都市空間像を描く。

足立区 千住河原町・橋戸町・緑町1丁目

隅田川右岸から首都高の姿を望める

❻ 2014 - 既成市街地の更新と魅力ある住空間の創出
荒川区 都営荒川線荒川二丁目駅隣接

ヒューマンスケールで穏やかな市街地

Theme
細分化が進んだ既成市街地の更新は大都市において大きな課題だ。その構造・社会的課題に対応し、周辺市街地との関係を考慮した空間構成の開発を考える。

❼ 2017- 河川沿いのエリアイノベーションと「豊かな混在」を持つ住空間の創出
江東区 清澄一丁目

川沿いには様々な工場が

Theme
現行のゾーニング手法や均質なタワー型住宅は必ずしも現在のライフスタイルの多様化に対応していない。**混在とその関係性から、都市集住の価値を問い直す。**

主担当者（敬称略）：遠藤 新 -2002　野原 卓 2003-2010　黒瀬 武史 2011-2015　中島 伸 2016　永野真義 2017-

1980　1990　住宅地演習時代

1990年代の資料

演習時間の大半が住棟配置・動線計画・断面図等の純粋な設計にあてられ、「周辺環境の理解」「居住者像の検討」は演習初めにのみ登場する。そのぶん、誘導居住水準など、「住宅地」で理想とされる要件には厳密だった。

2000　2002夏 黒瀬先生が取り組む

テーマ課題の黎明期
住宅地をベースとしつつ、将来像を自由に考えるという意図が見えるようになる。事例見学やレクチャーにグループ作業など、敷地を多角的に考えるうえでヒントとなる時間が増えた

2003 課題書　影響だろうか。

2004 報告書　「住宅団地、住宅地開発ではなく『街をつくる』という意識で。」「公共が区民に提示するのにふさわしい案を期待」行政マンだった北沢先生の悩みは共通のようだ。「周辺敷地模型を TA が担当し、学生は敷地内に集中させた」昔から学生の負担と成果物の水準のバランスへの悩みは共通のようだ。

2005　2007夏 永野先生が取り組む

方向性の洗練と細分化
基本技術を習得する「目的」、対象地の特性・将来像を模索する「テーマ」が明確に章分けされて記述されるようになった。他方、設計対象は「住宅を含む市街地」であり、住宅地計画も強調されている

2005 課題書　途中課題に、敷地境界の土地に沿った一棟の住宅を建てるものが登場した（～2014。今の2年冬期演習に該当）。1か月弱で家も街区も設計するのはかなり忙しそう。

2008 課題書　課題書のデザインが現在とほぼ同じになり、「目的」に「空間把握力」「プランニング・デザイン力」の習得が加わった。演習内が計6段階に分化。細分化して途中課題の進行を早めるのが目的か。

2010

戦略的発想の重視へ
対象地での地域分析を設計前に密に行えるようになり、将来像を戦略的に考える作業に重きが置かれた。また、学生視点のこまやかな改良が相次いで加えられ、演習を外部者に伝える動きもこの時期に本格的に始まった

2010 課題書　「外部講評会」が内部の発表と分離。しっかり時間を取って伝えられる方式に。

2013 冬　自身の経験をもとにプレゼンの見せ方を語る修士 TA のレクチャーが授業に導入される。

2014 課題書　演習のフェイスブックページが開設され、演習内容が広く公開されるように。2年生の演習時間が増えたことで、3年生より前に設計に触れる機会を得られるようになり、敷地の変更とともに時間構成も大きく変化した。

2015

自由さと自主性
演習のバトンを引き継いだ永野助教のもと、設計対象地を範囲内で自由に選ぶ、資料に頼らず自身で事例見学のポイントを抑えるといった取り組み。演習は今後も進化を続けていく

2017 課題書　手書き図面の技術が習熟した後、図面作成ソフトを教えるようになった。覚えることは増えたが、図面作成の省力化を目指した。

特別インタビュー「演習への思い」—旧・新 演習担当の助教2人に訊く
The Another Side Story from DUE Teachers

右も左も分からず試行錯誤して演習を解かねばならない学生にとって、何度も教室に足を運び議論を交わす助教は頼もしい指導者になる。
しかし、演習を解く側ではなく「作り手」としても、様々な試行錯誤や思いがあるのでは——そんな疑問から、先生方の目からはどのように演習が見えているのか、お話を伺った。

2004年 東京大学工学部都市工学科　卒業
2006年 修了後、（株）日建設計に入社
2010年は非常勤講師として、
2011 - 2015年まで助教として
「地区開発計画」に携わる。
現在、九州大学大学院
人間環境学研究院 准教授

黒 瀬 武 史 氏
Takefumi KUROSE

― 学生時代の思い出 ―

模索と苦戦の記憶
敷地は神楽坂の矢来町ハイツ。当時の教員陣は、遠藤新先生が助教で、北沢先生、非常勤講師の高谷さん(※1)。今より敷地が小さくて住宅中心の設計だった。「設計する公共空間は周辺住民も使う」とか、「駅から対象地までの道筋を考える」とか、住宅地を地域に開く考えはあったけれど、周りの土地も含めた地域の将来像までは考えてなかった。私は、戸建のような4面採光の住戸を持つ集合住宅を作りたかった。正方形に近い各住戸ユニットがほぼ独立して、間をブリッジでちょこっと繋がっているような感じ。中間発表までは評判悪くなかったのだけれど、詳細を詰める過程でブリッジが邪魔で「住戸をくっつけた方が効率いいじゃん」と思ってしまい(笑)、最終的にただの雁行した集合住宅になってしまった。自分でもこれじゃないな、と思いながら最終発表に臨み、案の定、「前のほうが良かった」と言われた。
あと、初めて作った模型がすごく下手で、芝生（の粉）が建物の壁に付着していて講評では「カビ生えてるの？」と言われたり、北沢先生に「この屋根は割ったほうがいい」と割られたり…。先生方は今より辛辣でしたが、講評会をとても楽しみにしていて、ニコニコしながら模型を割る、みたいな風潮だった。演習中は「これぐらいできろ（できるの命令形）」と言われるだけだったので、図書館に行って、ドイツのテラスハウスの図面集などを自分で探していた。

― 演習主担当として ―

対象地に想像力を
僕が選んだ敷地は千住大橋（リーガル工場跡地）と荒川(編集部注：年表❺－❻)ですね。水辺の近くというのもあるんだけど、まじめな話をすると、東京の下町の多様な人が住んでいる土地に学生にちゃんと足を踏み入れてほしかった。育ちのいい東大生も多いから、密集した住まいや公営住宅がある街を知って、何が出来るんだろうって考えてほしい。あとは敷地に何度も行ける近さも大切にした。工場跡地を意識した訳ではないが、実際にいま空地があって、自分の計画が「もしかしたら実際にできるかも」というリアリティも重視していた。

頑張りに応える為に

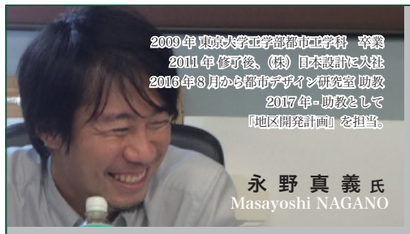
教員陣も学生も1つの机を囲む、最終発表の様子

学科で大型のスキャナーを買ってもらい、発表時に大型モニターで作品を映すのを始めました。A1パネルで発表するという基本は変えたくないけど、後ろの学生にもパネルが見えて他人の講評でも勉強してほしいなと。丁度「アーバンコモンズ」という大型モニターがある部屋ができ、学生も指を差せば模型に手が届きそうな距離感を心がけました。適度に狭く、模型も図面も明るい中で見えて、椅子も動く。大部屋で先生と学生が乖離していた状態より、多くの学生が仲間の作品を見てコメントしてくれるようになった。
都市工の良さは全員が発表をするところだけど、めっちゃくちゃ時間がかかる。でも「3ヶ月昼夜頑張ったのに発表2分かよ」みたいな学生の思いに応えるために、ちゃんと講評したい。そこで内部の講評は午後を全部つかってみっちりやって、外の人をお呼びする講評会を独立させ、頑張ってる作品を選び、もう一度違う視点で議論する機会を作った。都市工内部の見方だけでなく、社会からの評価、実際に仕事している人が自分のプレゼンをどう見てくれるかを実感してほしかったので、設計者だけでなく、自治体やUR、都市計画プランナーの方もお呼びした。上位のものだけでなく作品の多様性を意識して選んで、学内で先生からボロボロに言われた作品が褒められたり、あるいはその逆だったりのギャップも感じてほしいなと思っていた。

プロセスを指導したい
自分が出題しているから、毎年めちゃくちゃ責任を感じていた。特にみんなが同じ箇所で躓くと「自分のせいだな…」と。学生には一生に一度しかない演習なわけで、来年変えようなんて悠長な話じゃない。でも、及第点みたいなのを教える演習もつまらない。スルスル解けてみんな同じような形になりそうだと、今度は教え方が画一的だったかもと反省したり。
だから教えるプロセスのデザインはすごく重要。完成品として良いものを見せられても、それがどのように生まれたのかがわからないから、そこを伝えることを意識していた。スタディの作業プロセスを三島さん(※2)がレクチャーしてくれていいなあと思って。あとは、詳細(1/200)を設計すると全体(1/500)への考え方が変わるから、詳細設計を早くやるように日々説得していた。スケールを横断するのがやはりこの課題の重要なところ。

― 今後の展望 ―

Q. 九州大学での演習でやってみたいことは？
建築学科だからこそ、敷地の周りとの関係の要素を大切にしたい。新築も改修も経験している大学院の演習では、団地の再生など、改築と新築を組み合わせたテーマも考えられるのが強み。建物も外部空間も境目なく考える力は、これから建築学科でもより大切になると思う。



2009年 東京大学工学部都市工学科　卒業
2011年 修了後、（株）日本設計に入社
2016年8月から都市デザイン研究室 助教
2017年- 助教として
「地区開発計画」を担当。

永 野 真 義 氏
Masayoshi NAGANO

― 学生時代の思い出 ―

自分を貫いた演習
学生の時は「先生の言うことは聞かないぞ」と思っていた。まったく新しい集合住宅を考える唯一のチャンスだから、普通のものを作ってもしょうがないと。反抗心が強かったけど、前の演習で西村先生に褒められて調子に乗っていたのもある。都市工の先生方の指導は提案型だし、助教や TA の人に提案されるのは納得いかなくてあまり聞いてませんでした(笑)。嫌な学生だったと思います。教授陣はオーラがあって断言するのでそこは受け入れざるを得なかった。

学生時代、北沢、中島両先生に説明する永野先生

最初のエスキスではつまらない案しか出せず、北沢先生にも「普通だな」と。そこで、個別の条件に応じて考えるのに限界を感じ、全体で1つのダイアグラムが描けるプランに変え、空間的にもひとつながりの住棟になった。事例見学の中で、中庭型も公開空地型も両方使われてないと思ったので、住棟に陥入して部分的に交差する、中庭でも外庭でもない公園の環を作った。そこからは順調で、断面や住棟の形をひたすら微調整した。その際、トレーシングペーパーに描く手作業は凄くしましたね。「全部作らないとわからない」と言われ、越中島の敷地3ha分を1:200のスケールで作って、大きな作品に。作業が根本的に早いかといわれるとそうでもないが、やり切ったとは思います。

完成した巨大な"The Rings"。コンセプトにぴったり沿ったタイトル

― 演習主担当として ―

住宅×大きなテーマ
今年度は4つ敷地候補を出し、清澄白河(編集部注：年表❼)を選びました。2年演習で小さな集合住宅を扱うので、都市の中で最多の割合を占める住宅をやはり演習の基本に据えつつも住宅以上のプラスアルファを考える、そんな課題にしたかった。水辺からの都市再生という東京の大きなテーマがある中で、隅田川の左岸は首都高でほとんどが塞がれてる。その限られた土地のなかで、清洲橋や清澄庭園に隣接した象徴的な敷地です。別案は八丁堀の細長い敷地で、堀跡を通じて東京の水を理解してもらったり、マスターアーキテクト方式で複数人で1敷地を完成させると調整能力も求められて面白いんじゃないか、とか。結局、窪田・中島両先生と議論して清澄白河になりました。

システムを意識せよ
事例見学では個人に発見カードを作ってもらい、みんなで共有してもらいました。総論的な見学地分析は、配布資料の書き写しになり、応用が効かないのではという問題意識があった。実例の工夫点や問題点を自分なりに発見して、設計に活かしてほしい。その中でディテールよりも、配置などのシステムを発見できるようになってほしい。
僕が好きなのは、システムがちゃんとできている案。感性でまとめた設計も内部的には「スケール感がいいね」と評価されるんですが、説明がうまくできないと少し建築的だと思う。ぱっと見ていいと思わせることも重要なんだけど、僕は社会に出たとき、様々な主体に対して「こういう仕組みで作っていくと、こういう良さがある」と説明して納得させられないと都市工では意味がないって気がしている。後付けでもいいんだけど。この状況に近いのが外部講評会。講評者は初めて聞くから、スタディのプロセスはわからない。だから内部だと「いいね」となっていても外部の人に伝わらないギャップの理由は、そこにもあるのかも。
演習の初歩として、スタディのやり方や、隣棟間隔とかの基本をきちんと分かってもらいたいが、同時に、都市工としてアーバンデザイナーの強い苗木を育てたい気持ちがある。しっかりダイアグラム教育をやり、説明できる作品を増やすというのが来年のテーマかな。

学生との試行錯誤
素直な学生が結構多い。自分は先生の話を聞かないタイプだったのにというジレンマはあるが、目の届かない学生を減らすべく無理やり話しかけるようにしています。演習の時間はタイトだから、中々決まらない所はこう進めたら、と押すことがあるけど、そこを最終発表で突っ込まれたりすると凄く申し訳なくなるし、小さなエスキスも責任は重い。教員にも意見が色々あるというのは永遠のテーマ。様々な立場をロールプレイしてくれている、と思って前向きに捉えてほしいですね。

― 今後の展望 ―

Q. 演習で今後やってみたいことは？
現実味がどこまであるかだけど、建築学科が同時期に集合住宅の演習をやっているらしくて、今後やりあえる場所があると面白いですね。僕も当時そうだったけど、建築学科を意識している学生もいるはず。すごいクオリティの模型と圧倒的なプレゼン能力が彼らにはある。でも、ビジュアルでは勝ちを譲っても、例えば周辺の読み解きや都市的な問題に答えている、そんなところでは絶対負けないというライバル意識を持ってほしい。

(※1) 高谷時彦氏(非常勤講師 2000-02)、現：東北公益文科大学特任教授、幕張ベイタウン・コアの設計者　(※2) 三島由樹氏(演習助教 2013-15)、現：FOLK Landscape Architecture, Inc. 代表取締役

迷える子羊の鳴き声 ~M1 男児の相談録 ~

Ask the Doctor Course Members!

text_OKAYAMA/M1

博士の方に相談してみました！

こんにちは。マガジン編集部の M1 岡山です。現在大学院に入学して早３ヶ月。生活には慣れてきましたが、あらゆることで悩んでいます。今回は３人の博士課程の先輩方に集まっていただき、日々の悩みを相談することにしました。先輩方の言葉は心に響くものでした。

修士論文のテーマが決まりません ...

岡山：まず修士論文について質問です。どのタイミングで自分がやりたいテーマを絞りましたか？

宮下：私の場合は卒論で取り扱った静岡の中心商店街の歴史が修論の一部分になりました。大学院では、学部時代とは全然違うことしたいなって思いもありました。でも最終的には関心の骨格は今までやっていたことだろうということで、卒論を肉付けするという感じで修士論文を纏めました。最初の一年で自分の関心をあっち行ったりこっち行ったりするのはありだと思いますよ。

土井：私は M1 の時は本当にプロジェクトばかりやっていた感じで（笑）。たしか M1 の秋頃に当時助手でいらっしゃった中島直人先生が、風致に関する資料整理をやらないかとお声がけをしてくださったのがきっかけです。

益邑：僕の場合は最初の発表は東京都江東区の自主防災組織の現状から、被災した時の課題を洗い出すみたいなことをテーマに掲げたんですけど、結局はプロジェクトをやりながら研究を別の場所でやるっていうのは結構厳しいかもと思って、プロジェクトで行っている場所にしました。M2 の５月くらいにテーマを決めて、そこからいろんな課題を洗い出していくみたいなことをやってましたね。

岡山：修論を進める中で、独自の調査をすると思うのですが、全然想像がつかないというか、調査の内容とかって、どう決めてたのか気になります。

宮下：自分の場合は、石川栄耀の戦前の雑誌の連載コラムが今の都市の現状をみるために重要なんじゃないのかと思って、それをどう生かすか、現在のデータとどう比較するかを考えてやった。

益邑：研究をやっているうちにやらなきゃいけないことって出てくるよね。僕の場合は最初は仮設商店街の状況がわからなかったので話を聞きに行って、一人一人現状が違うことがわかって、個別に訪問して行くことが重要かと思ったのその方針でやりました。アンケートじゃなくて、自分で話を聞いてそれを記録していかないと、ろくな研究にならないというのが見えてきたからです。どのタイミングでプレ調査をするかというのも大事かなと思います。

土井：私は、中島先生との作業を進めていく中で、「保勝[1]」という運動を解いていく資料と出会い、そこからさらに掘り起こしていくという歴史研究をやりました。

益邑：既往研究を多く読むことで、研究の方法もある程度見えてくることはあると思いますよ。

博士進学を考えているのですが ...

岡山：博士の進学、または就職されたきっかけや当時どういうことを思っていたのか聞きたいんですけど…。

宮下：自分の場合は元々高校時代から大学の先生になりたかったんですよ。なので就活も全然していないんですけど。

土井：迷える子羊とは大分違うね (笑)。私は１年強プロジェクトに没頭したこともあって、研究の手応えが出てきたと思えたのが M2 の冬で、研究自体は楽しかったけど、自分の研究がどのように地域に貢献できるか実感がもてなかったし、実地でやりたいという思いがすごく強かったので、すぐ進学することは考えなかった。でも仕事で色々な研究会などに顔を出させていただくことが増えると、自分の背骨といえるものが持ちたいと思うようになって、博士で研究室に戻ってきました。私の場合は同期の岡村君[2]が博士に進学したし、助手でお世話になった野原先生とも時折情報交換させていただいたり。それほど多くはなかったですが、仕事で西村先生や北沢先生とご一緒する機会があったことも恵まれていると思います。岡山君がどうするにしても、研究室のつながりは大切にしてほしいなと思う。何がきっかけになるかわからないから。

宮下：あと、博士を取った後の選択肢が修士から働くのとは違う展開になってしまうことを、ある程度覚悟する必要がある。研究室を起こす、大学教授になるとかなら必要な手段だけど。自分の仕事を興すとか、企業・自治体とかを考えているなら、選択肢が変わってくるのは間違いない。良くも悪くもそれを自覚して考えることは必要だと思いますよね。

益邑：社会人を経験してから大学に来るケースが、東大の都市工はすごく多い。土井さんは仕事してから博士課程に進むメリットはどういうふうに考えますか。

土井：仕事では都市計画の方とご一緒することはむしろ稀で、建築や土木はもちろん造園や民俗、歴史といった他分野の方とご一緒することが多かったので、単純にものの見方の幅を広げられたのは大きかったと思います。全国の活動団体の方など、いろいろな立場の人と様々な現場に携わることができたのも財産ですが、そうした経験を学術に昇華できるかどうかは、力量次第だと思います。私が修士でいた頃に比べて、三学科の連携はずいぶん深まったと思いますが、都市工はもっと学際的な場であってもいいなと思います。

益邑：ぼくはそれなりに悩んだタイプ。修士に入ったときは博士に入る気はなかったので。きっかけは M1 の復興デザインスタジオの続きで論文を書くというのがあって、自分しか知らないことを見つけた瞬間に、こんなに面白いことは他にないなと。僕の悩みはちょうどその瞬間に就活の時期だったということです。こんな面白いことやってるなら就職しても、戻ってきてしまうなと。もともと最初から博士課程に進むつもりで M1 から論文１本書いていたのなら、だいぶ違うなあと思うときはあります。

▲ インタビューの様子

岡山：博士になって修士の時にやっていた方が良かったなと思うことはありますか？

宮下：僕は本をたくさん読んでおけばと思いました。自分が研究、仕事する上で、何か発想するときの選択肢は圧倒的に蓄積しておかないと出てこないので、時間のあるうちに本を読む、色んな現場に行くなど、情報をもっと広い分野で蓄積しておいたら良かったのかなと思います。インプットすることかな。

益邑：本は読んでた方がいいですね。そうしないと話が噛み合わないよね。例えば､パタン･ランゲージだってみんな読んでいるし、知識がないと議論ができないというのがまずあります。僕から言うとすれば修士の時に議論をするということが重要だと思っていて、今でも現場を知らなくても議論するじゃないですか。足りない知識とかがもちろんあるという前提で、議論することに慣れておかないと。そういう空気が僕が修論を書いているときには同期の間にあって、よかったと思っています。相手の修論の発表を聞いた後に、相手の現場にいったことがなくても、間違ってんじゃないのとか、この論文いいよとか、そう言うのは習慣づいてたかな。

宮下：いろんな町に行くのは大事だよね。ストックホルムにガムラスタンというのがあるんですよ。島が旧市街なんですけど、そこは全部曲線の島で、ヒューマンスケールで、ある程度の狭さみたいなのがいい。

益邑：パルセロナとか結構好きなんだけど、阿部さんの本[3]を持ってあれをガイドブックがわりに旧市街を歩くと超面白かったよ。

宮下：僕はベネチアに行った時に、一番最初は陣内さんの本[4]を読んでいなくて、２回目に行った時は読んで行って､そう言う意味では本を読めってことですね。

益邑：うちの研究室は研究室旅行に行く前に、ciniiで行く場所の地名で論文を探して、共有したりしています。間に合わないから行きの新幹線で予習するときもあるんだけれど、それをすると全然違いますよ。

プロジェクトの意義とはなんですか ...

土井：プロジェクトは、もちろんよいアウトプットを出すことも大事だけど、今、プロジェクトを一所懸命にやっておくことはすごくいいインプットにもなると思いますよ。何をキャッチするかは自分次第なんだけど。

岡山：今、プロジェクトの作業をしているうちに時間が過ぎていて、本を読むとかインプットできている感じがありません。

▲ インタビュー趣旨説明の様子

宮下：それはプロジェクトの中で問題意識を持つってことじゃないんですか？プロジェクトでやるべき課題の中で自分なりの課題を見つけておくと、一個一個のタスクを乗り切る中で達成感が違うと思うんですよ。そういう人が集まってプロジェクトをやるのが、一番成果が上がると思う。ただするべきことをこなしていたら、それは仕事なわけじゃないですか。

土井：単にタスクをこなすのではなくて、研究を更に深めていくためのすごく貴重な経験だと思うので、自分の欲を出してもいいと思うんですよね。もちろん、誠実に取り組むことが大前提だけど。

宮下：現場に関わるときに、利害関係や制約なしで関われるのは学生の特権というか。コンサルタントだって自分の好きなことをしてるのではなくてお客様あってのことだから。現場も学生だからこその関わり方を望んで会社ではなく大学とやっている部分もある。

土井：今しか関われない地域、プロジェクトがあると思うので、やらされているのではなくて、それを意識するだけでも見えてくるものが違うと思います。

岡山：本日はありがとうございました。

土井：迷える子羊はどうですか？迷いが深くなったんじゃないですか？

岡山：はい、でも深くすることも大事なのかなと思いました。

－１時間以上に及んだインタビューから数日が経ち、進路の決断はまだできていない。しかし慌ただしい日々に、浮き足立つ自分の足は少し重みが出て来た気がする (岡山)。

1.「保勝」とは「景勝地の保全」のことで、全国各地の景勝地が各々で保全の会を持っている
2. 岡村 祐 首都大学東京 都市環境学部 自然・文化ツーリズムコース准教授
3. 阿部 大輔：『バルセロナ旧市街の再生戦略―公共空間の創出による界隈の回復』(2009)
4. 陣内 秀信：『ヴェネツィア 都市のコンテクストを読む』(鹿島出版会 , 1986)

マガジン版 自著を語る

西村 幸夫

▲ 1981 年、29 歳で行った福岡県 柳川の現地踏査の様子。

『町並みまちづくり物語』・『環境保全と景観創造』

今年度中に出版される本を含めると、これまでに市販されているものとして単著 11 冊、編著書・監修書 56 冊、共著書 75 冊を書いてきた。都市計画研究者としてけっして少なくない数だと思う。自分たちがやってきたことを世論に訴えるためには一般書を書くことが必要だった。ただ、本そのものが語ってくれることで十分だという思いから、これまで一度も書籍上梓の背景を語ってこなかった。マガジン編集部からこういう機会を頂いたので、初めて自著を振り返ってみたい。

『町並みまちづくり物語』（古今書院、1997 年）と『環境保全と景観創造』（鹿島出版会、1997 年）は、体裁も内容も対照的ではあるが、私の気持ちのうえでは一対のものである。45 歳の時の本である。30 代の時に立てたテーマに対して私が出したやや遅れた回答レポートでもあった。同じ年に刊行されているということもあるが、前者は日本における運動論をわかりやすく具体的に描き、後者では運動の背後の理論を国内外に求めている。前者では自分かかわったまちを中心に、リーダーたちの名前を表に出していかに躍動感あふれる現場を紹介するかに腐心した。

この本はさいわいにも台湾（繁体字版 1997 年）と中国本土（簡体字版 2007 年）で翻訳出版され、日本よりもはるかに多くの読者を得ている。台湾や中国のまちづくり専門家とお会いすると、この本を読んだことがあると言ってくれる人がとても多い。本を書くという行為はじつに孤独な作業なのであるが、ゆっくりとではあるが自分の地平線を越えて想いが伝わっていけるという実感を持つことができるのも、本を書くことのだいご味のひとつだろう。

後者は日本建築学会の論文賞（1996 年）の対象となった一連の論文がもととなっている。正確な表現と注記に力を注いだ。

ただ、両書とも丹念に加筆はしたものの、既往の論稿を一冊にまとめただけのものなので、何かしら心に晴れないものが残っていたのは確かである。

● 本の紹介（左３冊は同書籍が翻訳されたもの）

1997.2 日本版　1997.11 台湾版　2007.4 中国版　環境保全と景観創造

町並みまちづくり物語

(古今書院、1997)

著者自らが、長年にわたり指導してきた全国各地の市民と行政、専門家が力を合わせたまちづくりの経緯をドラマチックに紹介する。

環境保全と景観創造

(鹿島出版会、1997 年)

歴史的環境保全の思考の枠組と、景観創造のこれからの行政施策を、ナショナルトラストを始めとした事例を挙げ、論理的・実践的に展開する。

information

Project Headlines -PJ 近況早わかり -

Web 記事もご覧ください。http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/►

Archives - 7 月の web 記事

07.17 **高島平ヘリテージミーティング**
キックオフミーティングがあり、いよいよ動き出した高島平のプロジェクト。久々投稿の中村が報告する。

07.22 **学部３年生外部講評を終えて**
永野助教を中心に行った演習課題の講評会が終わりました。TA として見守ってきた M1 中戸が報告。

07.23 **「歓迎！本郷旅館街」展**
文京シビックセンターの一室を借りて本郷の情緒あふれる旅館をテーマとした展示会を開催。M2 三文字が報告。

07.28 **都市縮退シンポ 2017 開催！**
6/25(日) に前デザ研助教の黒瀬准教授 (九大) が計画したシンポジウムを D3 企画者の一人である矢吹が報告。

Hey listen, - ちょっと聞いて！ -

小高 PJ 計画策定に向けてスパート

小高ではアクションプラン策定に向けて打ち合わせを重ねている。また､「東町ひだまり菜園プロジェクト」も進行中です。そして写真は 7/1 に開催された「小高大蛇伝説まちあるき」の様子です。(篠原)

富士吉田 PJ 火祭りに向けて

上吉田では毎年火祭りが８月 26,27 日に開催されます。それに合わせた行灯を用いたワークショップの準備や、町のマップづくり、活動報告通信の作成と忙しないながらも充実しています。(岡山)

８月の予定

8/3　高島平ヘリテージ mtg
同日 上野シンポジウム
8/5-11 三国調査
8/22-26 内子調査
8/26-27 富士吉田火祭り
8/31-9/3 建築学会 (広島)

編集後記

８月と言えば夏休みです。先日の２８日に研究室で行われた暑気払いの中で、夏休みについて話されていた西村先生の挨拶が印象に残っています。先生は、中間ジュリーへの労いの言葉に間髪を入れず、大学院生は夏休みが本番です、とてもにやかな笑顔で仰いました。そして、夏休みが一番成長する時期です、とも仰いました。中間ジュリーで一息ついたと思っていましたが、都市デザイン研究室の夏休みは本番です。一番の成長期です。怠けるも充実させるも自分次第。自己ベストな夏休みにしてやろうと思います。（岡山紘明）